山中湖の富士（2007年）

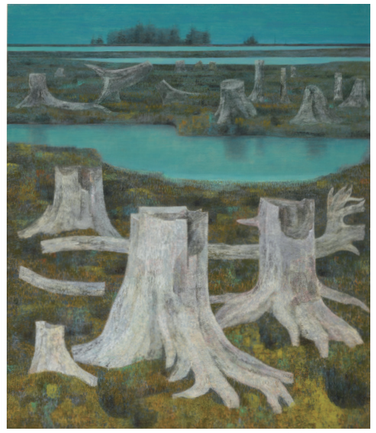
南丹市立
文化博物館だより
第19号
2023.3.31

現在、文化博物館では令和5年春季特別展「國府克展―山の魅力に惹かれて―」を開催しています。國府克氏は、昭和12年（1937）に京都府船井郡富本村（現南丹市八木町）に生まれ、地元の八木中学校から京都市立日吉ヶ丘高等学校美術工芸科日本画コースを経て、本格的に日本画家としての活動を始められました。

國府氏の手掛ける作品は、広大な原野や荘厳な山々、人々の暮らしの情景など様々なものがモチーフとなっています。昭和57年からはK2（カラコルム）やエベレストなど世界有数の山岳を眼前に取材し、作品として発表してきました。近年は、日本の富士山をテーマとした作品を多く制作するなど、山々から感じられる圧倒的な生命力を写実描写で表現されています。

本展は、國府克氏の約60年に渡る画業を、初期から近年までの作品約120点、スケッチブックや素描などの関連資料から紹介するものです。2月21日(火)から3月26日(日)までが前期、同31日(金)から5月7日(日)までを後期とし、前後期で大半の作品が入れ替わります。前期に一度ご観覧いただいた方も引き続いて楽しめる内容となっておりますので、この機会にぜひご来館ください。

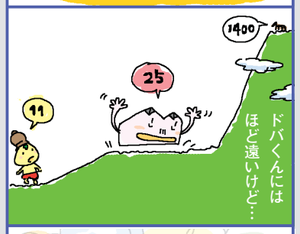
牛（2006年）

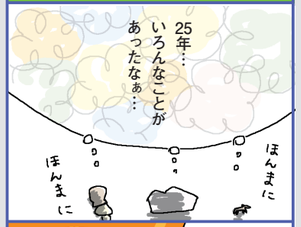


寂光（1969年）

どきタマちゃん［第11回］

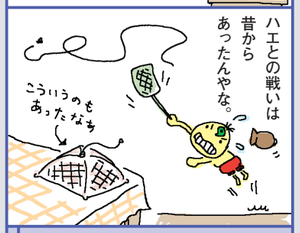
25周年





今後も地域で育まれてきた歴史文化を掘り起こして紹介し、後世に伝えるべくさまざまな活動を続けていきます。引き続きみなさまのご支援とご協力をお願いいたします。

収蔵品コレクション vol.1



どれぐらいハエを捕獲することができたのか実際に使用していないのでその利便性はわかりませんが、当時は人気商品だったようで海外にも輸出されたようです。

博物館News!

博物館オリジナルふせん完成！！（全5種類）

2023年5月初旬販売開始予定

園部城

どきタマちゃんA

どきタマちゃんB

ご当地A（そのべ・やぎ）

ご当地B（ひよし・みやま）

■南丹市立文化博物館受付にて販売予定です。

南丹市立文化博物館

開館時間 午前9時～午後5時（入館は午後4時30分まで）
休館日 月曜日／祝日／年末年始（12月27日～1月5日）
入館料 大人310円、学生200円、小人100円
※20名以上の団体は2割引、南丹市在住・在校の小・中学生は入館無料
※障がい者手帳等をお持ちの方及びその介護者は半額

〒622-0004
京都府南丹市園部町小桜町63番地
Tel. 0771-68-0081
Fax. 0771-63-2983
Email bunpaku@city.nantan.lg.jp
http://www.be.city.nantan.kyoto.jp/hakubutukan/

南丹市立文化博物館だより 第19号　令和5年3月31日発行　編集・発行　南丹市立文化博物館

2022 展示会回顧録

文化博物館では令和4年度に5つの展示会を開催しました。

1つ目は「るり渓」名勝指定90周年記念・春季企画展**「るり渓と南丹の名所」**（開催期間：令和4年4月2日～5月15日）でした。

南丹市園部町の南西部に位置するるり渓は、「滑（なめら）」と呼ばれており、江戸時代には園部・亀岡・篠山の諸藩士たちが遊興に訪れていたといわれています。その後、明治38年（1905）に船井郡長三宅従陰と西本梅小学校校長竹内源太郎が訪れた際に、渓谷の美しさに感動し、「るり渓」と名付けました。

「るり渓と南丹の名所」では、るり渓の名称指定のあゆみや環境だけでなく、近年の開発にも焦点を当てて紹介し、江戸時代の地図や開発時の写真などを使用して展示を行いました。また、「るり渓十二勝」、「園部八景」についても併せて紹介しました。

8月6日から10月10日（前期：8月6日～9月4日、後期：9月9日～10月10日）までは夏季企画展**「没後25年 麻田浩―心に映る風景―」**（1階常設展示室）と夏季特別展**「垣内古墳―発掘50年をふりかえる―」**（2階企画・特別展示室）を同時開催しました。

麻田浩は南丹市八木町出身の日本画家、麻田辨自を父に、同じく日本画家の麻田鷹司を兄に持つ、美術家の一家に生まれました。同志社大学経済学部在学中から新制作協会展に出品するなどの活動を始め、卒業後に就職した株式会社大丸を昭和37年（1962）に退職した後は、画家一本での生活を始めました。昭和46年からは渡欧し、パリを拠点にしながらも、日本の新制作展や安井賞展などに出品を続けます。昭和57年、50歳で帰国し、京都市立芸術大学西洋画科の教授を務めながら、滞欧時から制作していた石や水などの自然物をモチーフにした「原風景」や、「原都市」と名付けた廃墟や人工物を描いた作品を描きました。平成3年（1991）にはキリスト教の洗礼を受けたことにより、次第に宗教的・精神的なテーマに傾倒していき、キリスト教の世界観に着想を得た作品を描くようになりました。本展では麻田浩の初期から晩年までの油彩画、版画、ドローイングなどおよそ130点を展示し、麻田浩の全容を紹介しました。

「垣内古墳―発掘50年をふりかえる―」では発掘調査から50年を迎えた園部垣内古墳（南丹市園部町内林町）を紹介しました。

垣内古墳は4世紀後半に造られた全長84メートルの前方後円墳で、周濠を含めた全長は107メートルに及びます。口丹波地方の前期古墳では最大規模を誇り、周辺地域を治めた王の墓と考えられています。本展では垣内古墳から出土した、三角縁神獣鏡をはじめとする鏡6点、管玉・車輪石・石釧・勾玉などの石製品や武器や武具に代表される鉄製品（すべて一括して国指定重要文化財）のほか、発掘調査時の写真や発掘調査時の記録映像なども紹介しました。

続いて、10月22日から12月4日までは秋季特別展**「街道―人々のくらしをつなぐ道―」**を開催しました。南丹市域には、山陰道・篠山街道・若狭街道を始めとする複数の街道があり、古来より多数の人々が往来するとともに、物資の輸送や情報の伝達などが行われてきました。その在り方は時代によって変容しましたが、地域のくらしや文化の形成に関係してきました。本展では、古文書や絵図などの諸資料から南丹地域に所在する街道の歴史や周辺地域の文化について紹介しました。

令和4年12月17日から同5年2月5日までは、収蔵品展**「映画ポスターからたどる南丹市の映画文化」**を開催しました。この展示会では、株式会社そのべまちづくり工房より寄贈いただいた、園部劇場の元看板絵師、吉村和夫氏が名画上映会「スウィートシネマパラダイス」開催の際に制作した映画ポスターをはじめ、劇場の広告や平面図などから、南丹市域における映画文化のあゆみを紹介しました。

▲夏季展「垣内古墳」

▲秋季展「街道」

▲収蔵品展「映画ポスターからたどる南丹市の映画文化」

学芸員ノート

文字権左衛門が描いた絵図

田貫・佐々江・大谷・田原・世木・しわか・上野・久保・家田村・木住谷・しつみ谷ノ図
安永年間頃（1772～80）　南丹市蔵

画面上部分から胡麻川・田原川・木住川・中世木川の川筋周辺が描かれ、下部分で大堰川（桂川）へと合流します。赤色の線は道で、描かれている範囲は現在の南丹市日吉町域の大部分となっています。画面の上部中央の「北」と記されている直下には、「ゑび坂道」とあり、海老坂峠が示されています。

山国之図
安永年間頃
（1772～80）
南丹市蔵

絵図裏に「山国之図」と記され、中央の大堰川（桂川）を中心に、下部分の京都市右京区京北下町付近から上部の同市左京区花脊大布施町周辺まで描いています。

文字権左衛門は丹波国桑田郡岩江戸村（南丹市美山町三埜）の庄屋役をつとめた人物で、福知山藩士の古川茂正と篠山藩士の永戸貞著らが計画していた丹波国六郡の地誌である『丹波志』の編纂に協力していました。

権左衛門は明和七年（一七七〇）から安永七年（一七七八）にかけて、桑田郡北部を中心に船井・何鹿郡の地域を精力的に調査しています。調査に際しては永戸氏から確認して欲しい事項や現地の絵図の作成など、書状で様々な問い合わせがあり、権左衛門は後にそれらの書状を紙継し一書にまとめています。こうした調査のなかで作成された絵図に関しては、丹波国全域、南丹市日吉町周辺地域や山国周辺地域（京都市）など広範囲を描いたものや、中世城郭跡のように対象を限定したものなどバラエティーに富んでいます。しかしながら最も特徴的なこととしては「山」の漢字を多数使用する山地の描き方で、その表現方法は独特のものがあります。

その一方で、村や河川の位置関係などはおおよそ把握して描いているといえ、実際に現地を調査したことが反映されているものと思われます。また、峠の名称なども随所に書き込まれており、絵図の作成年頃における呼称がうかがえて参考となります。

なお、『丹波志』は永戸氏らの死去により完成することはなく、その後の寛政六年（一七九四）に茂正の子である正路が福知山藩主朽木氏の命により天田・氷上・多紀郡の部分を『丹波志』として全二〇巻・二五冊にまとめましたが、同書には権左衛門の調査成果が盛り込まれていません。しかし、権左衛門は独自に丹波国六郡をそれぞれにまとめた冊子を残しており、それには各村の石高・領主・寺社・遺跡・伝承などが記され、その当時のようすをうかがうことができる貴重なものとなっています。このような権左衛門が残した史料群は、地誌編纂の調査過程で作成されたものであり、先人の郷土史研究を垣間見ることができます。